古民家（旧栗山家主屋）の紹介

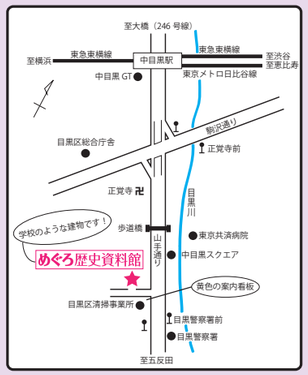
古民家は江戸時代に旧衾村（現在の環七通り西側あたり）で、代々「年寄」という重要な役職を務めた栗山家の所有する旧主屋が昭和54年（1979）、目黒区に寄贈されました。その後、竹林の美しい「すずめのお宿緑地公園」に移築・再現され、開館して42年目になります。

この古民家が建てられた年代については、安政４年（1857）に大きな改築が行われた記録があることや、大黒柱を含めた軸組の構法、南側の外縁に見られる建築様式から、江戸中期に創建されたと推測されています。構造の様式は桁行（けたゆき）7.5間（けん）（約13.6m）・梁間（はりま）５間（けん）（約9.2m）・広間型平面・寄棟造（よせむねづく）りというもので、移築の際、法規制によって元は茅葺（かやぶき）であった屋根を「茅葺型銅板葺」にした他は、ほぼ往時の姿のとおり再現しています。

見学のご案内

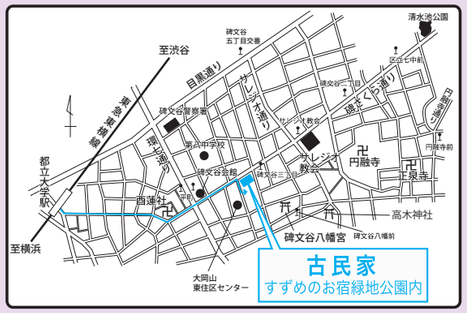
めぐろ歴史資料館と古民家には駐車場がありませんので、公共の交通機関をご利用いただくか、お近くの有料駐車場をご利用ください。（めぐろ歴史資料館には身障者用の駐車場あり。）

めぐろ歴史資料館



入 館 料　無料
開館時間　9：30～17：00
休 館 日　月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は火曜日）
　　12/29～1/3
電話番号　03-3715-3571
所 在 地　目黒区中目黒3-6-10
【電車】　東急東横線・日比谷線「中目黒駅」から徒歩約12分
【バス】　東急バス渋71・恵32系統（駒沢通り）「正覚寺」から徒歩約10分
　　渋41・黒09系統（山手通り）「目黒警察署前」から徒歩約５分

古民家（旧栗山家主屋）



入 館 料　無料
開館時間　9：30～15：30
休 館 日　月・火曜日
　　（ただし祝日は公開。両日とも祝日の場合は翌平日が休館日）
　　12/28～1/4
電話番号　03-3714-8882
所 在 地　目黒区碑文谷3-11-22 すずめのお宿緑地公園内
【電車】　東急東横線「都立大学駅」から徒歩約10分
【バス】　東急バス黒01系統「碑文谷三丁目」から徒歩約１分
　　森91系統「平町」から徒歩約３分

文化財係（目黒区教育委員会事務局生涯学習課）

文化財の保護・保存・活用・普及・埋蔵文化財に関する業務
電話番号　03-5722-9320
月～金曜日　8：30～17：00
（ただし、祝日及び12/29～1/3を除く）

めぐろ歴史資料館・文化財だより　つどい第16号
令和３年３月発行　　発行　目黒区教育委員会
編集　めぐろ歴史資料館
　　（目黒区教育委員会事務局生涯学習課）
印刷　勝村印刷所

主要印刷物番号
２教－７号

めぐろ歴史資料館・文化財だより

つどい

第 16 号

奈良絵本『竹とり』より＜天人の来迎の場面＞（当館蔵）

奈良絵本とは、室町後期から江戸前期にかけて制作された挿絵入りの絵本です。

当館では奈良絵本の『竹とり（竹取物語）』（全３巻）を所蔵しています。

上の絵は物語の最後、天人達の迎えによりかぐや姫が天に帰る直前の場面です。画面中央、朱色の着物を着た女性がかぐや姫、その左側で顔を押えて泣いている二人が、かぐや姫を育てた翁（おきな）と嫗（おうな）です。

〈目 次〉

令和３年企画展予告 ―― 2
令和３年度年間行事予定 ―― 2
文化財の修理 ―― 4
縄文時代のアクセサリー　耳飾り ―― 5
蔵出しの逸品 !! ―― 6

〈予告〉令和3年企画展
会期　令和3年4月24日（土）～8月29日（日）
「歴史資料館探訪～5つの物語～」

めぐろ歴史資料館では、目黒の歴史や文化、所蔵資料の調査を随時行っています。今回の企画展では、その調査で判明したあまり知られていない目黒の歴史の一端や新発見の資料など、5つのテーマについて展示します。今号では企画展をより楽しめるよう、そのテーマと概要について紹介します。

休館日：月曜日、月曜日が祝日の場合は翌日。ただし、5月3日・4日・5日は開館し、5月6日(木)は休み。

木曽伐木運材図（リトグラフ）

「木曽伐木運材図」元伐１（当館蔵）

「木曽伐木運材図」とは、木曽山中から木を伐りだし、木曽川の流れなどを利用して木を運ぶ林業について描かれた石版画（リトグラフ）です。明治20年代ごろの製作と推測されていますが、現在国内で所在が確認されているのは数か所のみです。当館では36点所蔵しており、過去に２度展示を行いました。今回はこのリトグラフが作成された背景や作者について、最近の研究成果の一端を紹介します。

目黒競馬場

明治40年（1907）から昭和８年（1933）にかけて下目黒に競馬場がありました。昭和７年には第１回日本ダービーが開催されるなど賑わっておりましたが、競馬場は府中に移転しました。現在は「元競馬場」という名前やコースの一部が道として残っています。今回の展示では、目黒競馬場の開設から終焉までの経緯などについて、当時の写真などで紹介します。

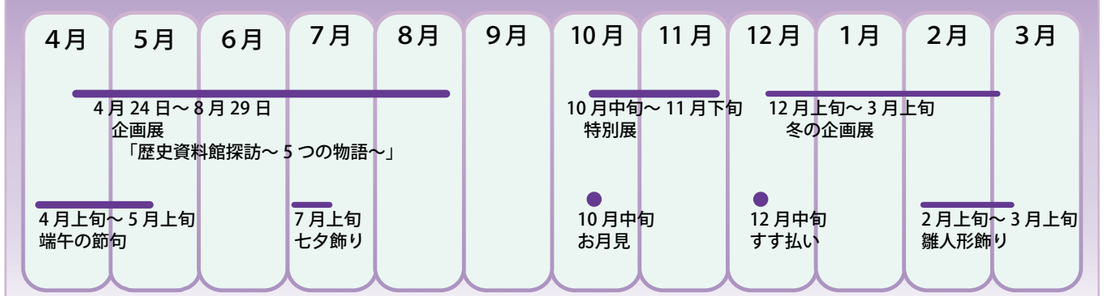
「トローチングレースの馬」（当館蔵）

竹取物語

『竹とり』より＜かぐや姫の生い立ちの場面＞（当館蔵）

本資料は『竹取物語』を題材とした奈良絵本の１つで、初公開となる資料です。使用されている料紙や本の形式などから、江戸前期のものと考えられます。今回の展示では実物資料を展示するとともに、本文の一部と挿絵の紹介を行います。

めぐろ歴史資料館・古民家 年間行事予定



諸般の事情により、日程・内容等は変更になる場合があります。詳細は『めぐろ区報』または目黒区のホームページでご確認ください。

青木昆陽

青木昆陽は江戸中期の儒者・蘭学者で、研究を通じて多くの著作を残しました。甘藷（サツマイモ）の栽培方法を全国に伝えたことから、甘藷先生として知られています。晩年には目黒に住んでいたとされ、瀧泉寺（目黒不動＝下目黒３丁目）には青木昆陽の墓が残っています。今回は当館で所蔵する遺言書から、青木昆陽の人物像と業績を紹介します。

「青木昆陽肖像画」（瀧泉寺蔵）

東光寺と吉良氏

「吉良頼康印判状」（東光寺蔵・当館寄託）

目黒・世田谷地域には、中世より吉良氏という武士がいました。貞治４年（1365）世田谷城主の吉良治家が子息の菩提を弔うために東光寺（八雲１丁目）を創建したといわれ、吉良氏と東光寺はとても縁が深かったとされています。今回は当館に寄託されている東光寺文書を中心に、目黒の発展に寄与した吉良氏について紹介します。

竹の里 ～竹取物語に寄せて～

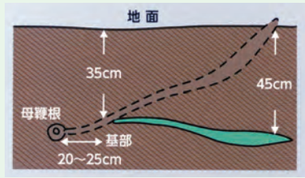
筍

『竹取物語』で、かぐや姫は竹から生まれました。目黒区は現在、ほとんどが市街地になっていますが、昭和初期までは「筍」の名産地として知られた農村地帯でした。今では竹林はほとんど残っていませんが、すずめのお宿緑地公園にはかつての名残をとどめる竹林を見ることができます。

公園内には、旧栗山家住宅を移築・再現しており（古民家）、江戸時代にタイムスリップしたような感覚に浸れるスポットになっています。（古民家のご案内については８ページをご覧ください。）

「根埋」が特徴の「目黒式筍栽培法」

目黒で行われた筍の栽培方法の「目黒式筍栽培法」は、「京都式」と並んで記されたほど全国的に有名で、目黒不動の門前では筍飯が食べられ、筍はお土産に買い求めることができたといわれています。



根埋の図

筍は竹の根の節から出てきますが、土におおわれていないと大きく育ちません。そこで地面に出てしまった根は45cmほど掘った溝に埋め戻す「根埋」が「目黒式」の特徴でした。（左図参照）地面から顔を出した筍は40cmほどに育った歯ごたえのある柔らかい筍で白子とも呼ばれていました。竹林では現在、地元の小学生による「目黒の筍復活プロジェクト」も行われています。

◆文化財の修理◆

～目黒区指定文化財修理の経過をお知らせします～

文化財の多くは木や紙、布、金属などからできていて、どんなに大切に扱っていても経年劣化という現象からは逃れられません。また、地震などの天災や、時にはカビの発生や虫蝕の被害に遭ってしまうこともあります。受け継がれてきた文化財を後世に伝えていくためには、適切なタイミングでの修理が必要です。

今年度３年ぶりに目黒区指定文化財の修理が行われました。その２件について修理の概要をご紹介します。（修理は令和３年３月末日完了予定です。）

絹本著色当麻曼荼羅図　祐天寺（中目黒５丁目）蔵

（写真１）全体（修理前）

奈良県にある当麻寺の「綴織当麻曼荼羅図」（国宝）の４分の１の縮尺模本ですが、縦横とも２ｍ弱の大振りな絵画です。画絹という絵画用に織られた絹に、阿弥陀三尊を中心とした極楽浄土が細密かつ鮮やかに描かれ、下辺には増上寺38世の白随の発願により享保13年（1728）に製作されたことが記されています。（平成13年９月４日指定）

（写真２）縦方向のしわが彩色表面を損ねている。（下辺中央の部分拡大）

修理内容

・表面の剥がれ落ちそうな彩色部分をニカワ（天然素材から作られた接着剤）で画絹に接着しました。
・裏に張られた古い和紙をはがし、画絹のしわやよれの部分を慎重に伸ばしました。しわやよれがあった部分には裏から細く切った和紙をあて補強しました。
・裏面全体に新たな和紙を張り、画絹を補強するとともに虫孔をふさぎました。
・巻いて保管する際の絵画表面への負担を軽減させるため、従来のものより太い軸木を新調し、従来の軸木は別に保管しました。なお、今回の修理により従来の軸木には過去の修理記録が記されていることがわかりました。

修理のポイント

仏像などの文化財修理は修理直後でもどこを修理したのか、一見ではわかりにくい場合があります。これは文化財修理が製作当初の真新しい状態と同様にすることを目的とするのではなく、現状維持を原則とするからです。現状以上の劣化や損傷が進行しないような処置はされますが、全く新しい色に塗り直すことなどは原則行いません。また、修理では可能な限り伝統的技術と天然素材が用いられます。

木造十一面観音立像　大圓寺（下目黒１丁目）蔵

11世紀前半頃（西暦1000年代前半）に製作されたと推定される、目黒区内にある仏像の中では最も古い仏像の１つです。像高は約167cmで、頭部から体部までを一材から彫る一木造という技法で作られています。十一面観音は、頭部にある小さな仏（化仏）を合わせて11の仏の顔が表現されますが、本像では劣化のため個々の表情までは確認できません。（昭和59年３月31日指定）

（写真１）右腕の部材と頭頂の化仏を取り外す

（写真２）光背の解体

（写真３）全体（修理前）

修理内容

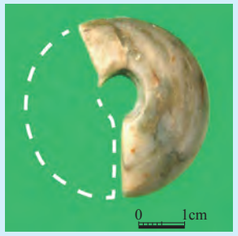
・仏像の内部、特に下半身に虫蝕（虫による食害）が拡がっている可能性があったため、殺虫のため炭酸ガスによる燻蒸処理を行いました。
・虫喰や干割れの損傷状況に応じて、木材による補修と漆を材料にした補填材の充填を行いました。
・尊顔が劣化等によって著しく損なわれていたため、劣化状況に合わせて鼻と口の形を整える補修をしました。
・光背（仏身が輝く様子を表した背後の装飾）に、一部欠損や部材の接続部に隙間が見られたため修理と補強処置をしました。

縄文時代のアクセサリー　耳飾り

縄文時代の遺跡を調査していますと、当時の人びとが身に着けていたアクセサリーを発見することがあり、そのうちの一つが耳飾りです。

日本における耳飾りの風習は縄文時代に始まります。その後、７世紀後半まで続きましたが、一旦そこで途絶えて、明治時代に再び取り入れられるまで姿を消していました。

縄文時代の耳飾りは、耳たぶに穴をあけてはめたり、ぶら下げたりして使っていたと考えられます。これは、耳飾りを装着した土偶の発見例があることや、ほかの民族の事例などから分かったものです。



（写真1）
大橋遺跡出土の玦状耳飾り

また、縄文時代には、単にオシャレとして耳飾りを身に着けたのではなく、呪術師といった役割、あるいは身分などをあらわす特別な意味があったのではないかとも考えられています。

目黒区内からも縄文時代の耳飾りはいくつも出土していますが、大橋遺跡からは蛇紋岩製の玦状耳飾りが出土しました。（写真１）この耳飾りは、環状の扁平な石製品に一か所切れ込みを入れて、穴をあけた耳たぶに通して付けていたものです。

東山貝塚遺跡から出土した土製の耳飾りは耳たぶにあけた穴にはめるタイプのもので、赤色に塗られていました。（写真２）

（写真2）
東山貝塚遺跡出土の耳飾り

めぐろ歴史資料館

蔵出しの逸品!!

めぐろ歴史資料館には、区民の皆さんから寄贈していただいた資料を含め、多くの資料が収蔵されています。企画展や常設展でこれらの資料を紹介してきましたが、紹介していない資料がまだまだたくさんあります。

そこで今回は初公開資料を中心に、当館研究員の選りすぐり４点の資料について紹介します。

『東京市荏原郡合併記念写真帳』

（写真１）『東京市荏原郡合併記念写真帳』

目黒区は明治から昭和初期にかけて、荏原郡目黒町と荏原郡碑衾町の２つの町域に分かれていました。昭和７年（1932）に目黒町と碑衾町を含めた荏原郡は東京市への編入が決まり、また同時に目黒町と碑衾町の２つの町域が合併となり、現在の目黒区が誕生しました。

『東京市荏原郡合併記念写真帳』（写真１）は荏原郡が東京市への編入が決まった際に、合併記念として東京荏原新聞社が昭和７年に発行した写真帳です。これには、市町村合併聯合協議会委員の集合写真をはじめ、目黒町役場（写真２）と碑衾町役場（写真３）を含めた荏原郡の各19町村の役場の写真や議員の集合写真が掲載されています。また集合写真には、写真の並び順と同じ順番で各議員の氏名や役職についても詳しく記載されている資料です。

旧目黒町役場は現在中目黒３丁目に、旧碑衾町役場は碑文谷４丁目あたりにあったとされています。目黒区が誕生した当初の庁舎は、後に区の中央に移転することを前提に旧目黒町役場を使用していました。その後、昭和11年に中央町２丁目へ、そして平成15年（2003）に現在の庁舎へ移転しました。旧目黒町役場と旧碑衾町役場は現在残されていませんが、当時の目黒町と碑衾町の町役場の面影を伝える貴重な資料です。

（写真２）目黒町役場

（写真３）碑衾町役場

電気あんか

現在、屋内で暖を取るときは空間全体を温めることができますが、かつて屋内用の暖房設備や器具といえば、部屋ではなく自身の手足など体の一部分のみを暖める機能が一般的でした。例えば、日本家屋における重要な設備であった囲炉裏の火は、単に食材の煮炊きだけでなく、家人が寒さをしのぐための暖房という役割も担っていました。

やがて、炭火や囲炉裏の燠を熱源とした道具が次々とあらわれました。そのうちの一つが、あんかです。あんかは、土でできた火入れの中に炭火を入れ、本体の上に布団をかけた後、そこに手足を入れることで暖をとる道具です。当館では、このうち猫あんかと呼ばれる土でできた蒲鉾型のものと、電熱を使った電気あんかを所蔵しています。

当館所蔵のあんかの中で特徴的なものといえば、東京芝浦電気株式会社で製造された子犬の姿をした電気あんかです。おそらく、家庭用電気製品が一般家庭に普及した昭和30年代～40年代のものと思われます。使用方法は、コンセントに電源コードをつなぎ、本体脇のダイヤルを回して熱を調整しながら使います。仕組みはいたってシンプルであり、かつ現在販売している電気あんかとほとんど使用方法も変わりませんが、「ネコアンカ」や「ネコ」とも呼ばれているあんかを、青い子犬の姿にして販売している点がユニークな資料ではないでしょうか。

犬型の電気あんか
（上：箱、下：本体）

「大正時代の運動会（中目黒小学校）」の写真

明治34年（1901）、目黒高等小学校が正覚寺（中目黒３丁目）の境内に開校しました。ところが、開校直後から入学希望者が予測を大幅に上回ったため翌年に移転し、その後、明治41年に義務教育の年限が延長されたことに伴い、尋常小学校を併置し、目黒尋常高等小学校となりました。それが現在の中目黒小学校（中目黒３丁目）の前身です。

この写真は、大正4年（1915）に目黒尋常高等小学校で行われた運動会の様子を写したものです。子どもたちが作った円の中央では、日本髪を結った女性教員がオルガンを弾き、男子も女子も着物に袴を着ているのがわかります。この袴は左右が真ん中から分かれるようになっており、激しい運動をするようなときにはそれをホックで止め、最下部についていた紐を膝のところで引き結んだようです。

当時は、目黒尋常高等小学校に目黒村立女子実業補習学校が併設され、運動会も両校が合同で開催していました。子どもたちが作った円の後方に見える女学生たちは、女子実業補習学校の生徒たちと考えられます。彼女たちが持っている棒状のものは薙刀です。大正初期の運動会の様子がうかがえる、貴重な資料といえるでしょう。

規（ぶんまわし）

（写真１）規

当館では、明治から昭和にかけてのさまざまな職人道具を所蔵しています。ご紹介する「規」（写真１）は、日本では古くから使用されてきた正円を作図する道具です。現在、正円を作図する際によく使われているコンパスは、17世紀にオランダから長崎に伝えられたものの形状に由来する、いわば「西洋式」の道具です。一方、規は「東洋式」の道具になります。

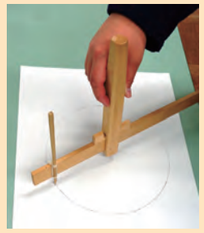
（写真２）「伏義女媧図」　伏義（右）が矩（曲尺）と女媧（左）が規を持っている。

佛教藝術學會『仏教藝術２』より

規の発生は古く、古代中国でも使われていたとされ、中国神話を題材とした「伏義女媧図（漢武梁祠壁画）」〈紀元後147年〉（写真２）にも見受けられます。日本へは、仏教や寺院建築技術とともに伝来したと考えられています。

当館所蔵の規は、桶製作道具一式の中の一つで、鉋や多数の木型と一緒に寄贈されたものです。縦と横の材を楔で固定して、半径を決めて正円を描き、桶の底板を作成する際に用いられたものと考えられます。ただ、当館所蔵のものは、固定する楔が亡失しています。

そこで、新たに規の復元を試み、縦と横の材を楔で固定すると、安定して正円を描くことができました（写真３）。現在では、桶屋の仕事を目にする機会はなくなりましたが、日本では、明治・大正時代頃まで規が使用されていました。



（写真３）
復元した規による正円の作図

日本民具学会　『日本民具辞典』（株式会社ぎょうせい、平成９年）
佛教藝術學會　『仏教藝術２』（毎日新聞社、昭和23年）
江戸東京博物館『明治のこころ　モースが見た庶民のくらし』（平成25年）

これらの資料は下記のとおり、常設展で展示を予定しています。

４月～６月…「大正時代の運動会（中目黒小学校）」の写真　　７月～９月…規
10月～12月…『東京市荏原郡合併記念写真帳』　　１月～３月…電気あんか

※日程・展示資料は変更になる場合があります。